

〔宮川長春展によせて〕

長春「水辺遊楽図巻」と師宣 『余景作り庭の図』

ようやく特別展「宮川長春」の図録を書き終えたら、展覧会担当者は「美のたより」の〇〇展によせて、にも書く義務があると言われ、はたと困った。巻頭の「美術の窓」もあるので、長春についてこれ以上書くのは正直つらいが、嘆いても事態は好転しないので、展覧会には出品しない国外所蔵の作品について書くことにしたい。

ダブリンのチェスター・ビーティー図書館に、「水辺遊楽図巻」(図1)と名付けられた長春筆の絹本一巻が所蔵されている。2010年1月に訪問した時にじっくり拝見させていただいたが、金泥なども使用した豪華な絵巻に、改めて驚嘆したことをおぼえている。絹継ぎのない、32.4×180.6cmの小巻であり、二十数年前、『秘蔵浮世絵大観』の解説を担当した時は、「豪華な座敷における遊興にはじまり、水上に構えられた瀟洒な数奇屋造りでの遊興と続き、水辺の人物で終わる一巻である。……最初の座敷での遊興は、吉原の揚屋に

おけるさまざまなありさまを一画面に集約して描いたものと考えてよいであろう。それと渡り廊下で結ばれた水上の屋の遊興も、基本的には遊所での遊びを念頭に置いたものと考えてよいが、このような規模の水上の殿舎が吉原その他にあらうはずもなく、状況の設定は長春の創意であろう。その左側には舟が着けられ、隅田川と覚しき大きな川が展開する。……構想が近世初期風俗画の邸内邸外遊楽図に通じるものがあり、世俗の快楽の到達するところ、現世の桃源郷を描出しようとしたものと考えてよいかもしれない。」と書いた。全体に菱川師宣の影響が色濃く、長春の作品としては比較的早い、宝永・正徳(1704—16)頃の制作という点は研究者の一致するところである。その後、当時は気づかなかったが、師宣の絵本『余景作り庭の図』に直接依拠していることを見出した。

延宝8年刊(1680)の『余景作り庭の図』は、種々の庭とそこに

遊ぶ人々を描いた庭尽くしの絵本で、見開きの図が21図収められている。

「水辺遊楽図巻」の建物、その上巻の「ほうらいのにわ」(図2)、「はつせさくら座敷」(図3)、「おとわの滝」(図4)、「すみだ川をにせたるにわ」(図5)から図を借りていることが判明したのである。すなわち、最初の座敷は図5、それに続く廊下は図4、水上に突き出した座敷は図3、その左上の小橋は図2から取っていることが確かめられる。図3の「はつせさくら座敷」は「あんをながながとつき出し、あんのさきに涼み所がけ作りになて、その下をせん水にてあしらい……」と記している。図を比べると容易に分かるので、一々説明はしないが、「水辺遊楽図巻」の廊下の前の桜も、図2の右の桜に依拠しているのかもしれない。

十七世紀後半から十八世紀初めにかけて、この長春の画卷のように、川に大きく突き出した水亭において(舟を並べて舞台を作った

ものもあった気がするが)、酒宴や踊り見物をする作品を稀に見かけるが、それらは、すべてフィクション、すなわち架空の桃源郷と考えてよいのであろうか。これほどの規模ではないにしても、大名家で、邸内に類似の施設を造り、そこで大宴会を催すことも時にはあったのかもしれない。幕府は、元禄8年(1695)8月、役者や踊子(女芸者)などを座敷や船遊びに呼ぶことを禁止している(『御触書寛保集成』)。当時、類似の禁令は度々出されているが、度々出されているということは、そういう遊びをした者がいたということになる。その中に、この図のような水亭を造り、芸者等呼んで豪奢に遊んだ者がいなかったとも限らない。

(浅野秀剛)

※図1は『秘蔵浮世絵大観 別巻』(講談社、1990年)、図2～5は『版本』(たばこ塩の博物館、1990年)より複写いたしました。

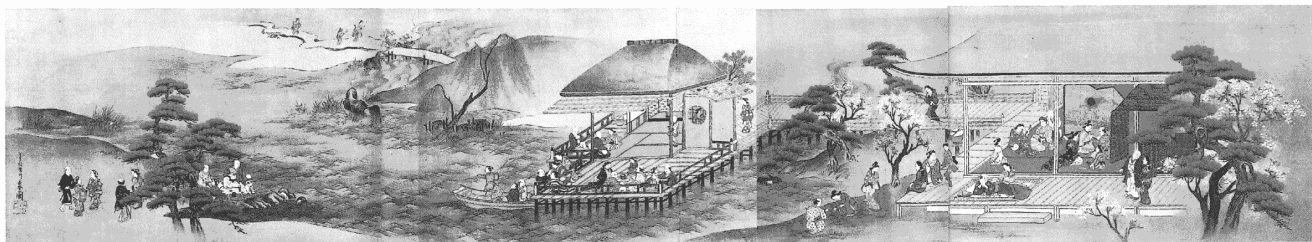


図1

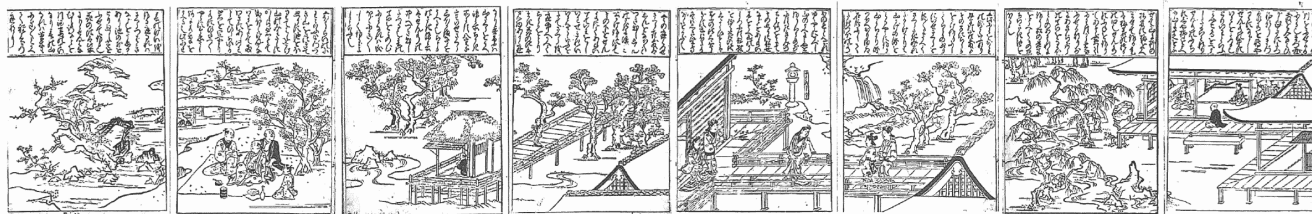


図2

図3

図4

図5

季刊 美のたより No.184

平成25年10月13日

発行 大和文華館